様々な色が交わる病院で

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

様々な色が交わる病院で

【Ｎコード】

Ｎ６５９６Ｃ

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

「赤に囚われし病室で」の続編。それぞれの感情が渦巻く世界を、それぞれの視点から描きました。過去とそれぞれの感情が交差する世界をお楽しみください。

case1－1：純白（前書き）

この世界だけで十分だったの。
この病室だけで私の世界は十分だった。
そう、貴方がいてくれるのなら、
外の世界なんて知りたくなかったのに…

case1－1：純白

私は病院の一室で目を覚ました。
何も思い出せない。
現実は今、目の前にあるこの光景だけ。

「良かった、気が付いたんですね。水沢さん。」

目の前には一人の少年が立っていた。
私より3歳～5歳くらい年上だろうか？

「あ、貴方は？」

「僕は君の主治医の杉村です。」

そう言いながら私の手首を優しく掴み、脈を計る。
触れたられた瞬間、私はドキリとした。
彼の真剣な横顔に、胸が高鳴る。
一体私はどうしてしまったのだろうか？まさか…一目惚れ？

「うん、脈は正常だね。あとは検査の結果次第だよ。」

彼は私を見てニッコリと微笑んだ。
彼の笑顔が、とても嬉しかった。

「じゃあ、僕はこれで。何かあったら手元のナースコールで呼ぶといいよ。」

「あ、あの！」

彼が行ってしまうのが、何だか切ない気分になって私はとっさに彼を呼び止めてしまった。
どうしよう…話す事なんて何も無いのに。

「あの、此処って何号室なんですか？」

我ながら可笑しな質問だと思う。
どうせならトイレの場所とか、売店の場所とか聞けばよかったかな？
でも、それを聞いた彼はクスリと笑って

「ここは２０３号室ですよ。」

と、教えてくれた。
結局彼は出て行ってしまったけど、私と向き合ってくれる彼にどうやら私は恋をしてしまったらしい。
彼の一つ一つの仕草が私の胸をときめかせる。
胸が締め付けられるように苦しいけど、嫌な感じじゃない。
こんな気分…何年ぶりだろう？でも人を愛せるって素敵な事よね。

夜になると杉村先生は検査の結果を持ってやってきた。
正直、結果なんてどうでも良かったのだけど。
彼は私を見つめて深刻な表情でこう告げたわ。

「言いにくいんですが、肺尖カタルのようです。しばらく入院してもらう事になります。」

嬉しい！
どんなに重病でも彼が来てくれるなら死んだって構わないわ！
でも、こうして貴方に見つめられると顔を上げてられないの。
私は俯いたまま黙って話を聞くことしか出来ない。
そんな私を見て、落ち込んでいるとでも思ったのだろうか？

「大丈夫、きっと治りますよ。」

そう言って彼は私の頭を優しく撫でた。
人に頭を撫でてもらうなんて凄く久しぶり。しかもそれが彼の手なんて！
嗚呼、こんなに嬉しい事って今まであったかしら？

…そうだわ、私には過去が無いんだった。
でも、いいの。今が全てだから。
これから幸せな時間が毎日訪れるのだから過去なんて必要ないわ。

そう、過去なんて……。

case1－2：桜色

一夜明けて、朝が来た。
昨日は何だか眠れなかった。だってドキドキしてしまって。
彼が来るのが待ち遠しい。
早く私のところへ来てほしい。
私の頭はそんなことしか考えられなくなっていた。

ガチャ――

数分後、私の期待通り病室のドアが開き、杉村先生が入ってきた。

「おはよう、水沢さん。具合はどうですか？」

私に微笑みかける彼の顔は、日の光を浴びてキラキラと輝いて見えた。
神様なんて見たことないけどきっとこんな感じの人なんだろうな、
そんな事を考えずにはいられない。

「はい、大丈夫です…。」

顔が上げられないのは相変わらず。
でも、こうしてると何も言わなくても彼は頭を撫でてくれた。
今日一日、幸せな気持ちで過ごせそうだわ。

こうして、また一日、一日と過ぎてゆく。
相変わらず、病気の方は回復していないみたいだけど、それでも別に構わなかった。
だって、回復してしまったら退院しなきゃいけないし、そうしたら先生の顔だって見られないから。
だから、ずっとこのままで良かったの。

でも、そんなある日――

「君にプレゼントがあるんだ。」

そう言って彼は私に小さな箱を渡した。
突然のことに私が戸惑っていると、彼は私に箱を開けるように促した。
私は丁寧に箱にかかっているリボンを解(ほど)き、そっと蓋を開けた。
中に入っていたのは、赤いベルトの可愛らしい時計。
彼は私の手首に優しく時計をしてくれた。

「私が貰ってもいいんですか？」

「はい。それに僕…ずっと貴方に言わなきゃと思ってたんです。」

「言わなきゃいけない事…？」

彼は一呼吸間を置いて、何時に無く真剣な…そのくせ照れくさそうに話を切り出した。

「僕は、水沢…いえ、正美さんのことが好きです。付き合ってもら

えませんか？」

え？私のことが、好き？

頭の中は混乱状態。でも、でもね――

「わっ！」

私は杉村先生…隆志さんに抱きついた。

それは言葉にするより、率直な感情表現。

少し勇気はいるけれど、せっかく貴方も照れながら好きって言ってくれたんだもの、私も頑張らないと。

「隆志さん…私も好きです。」

耳の近くでそう言うと、彼は私を抱きしめ返した。

きっと人生で一番幸せな瞬間。

大好きな貴方に、好きって言われたんだもの。

「だから、早く元気になってくださいね？」

「はい！！」

今までは、退院して隆志さんの傍を離れてしまうのが嫌で、病気を治す気なんて無かったけれど、退院しても貴方がいてくれるというのなら、私早く元気になるわ。

早く元気になってずっと貴方の傍に居たいから――。

case1－3：朱色

私の世界は此処の病室だけ。
この病室だけが私の世界。
それでも構わないって思ってたけれど、今は違う。
早く元気になって彼を安心させたい。退院しても一緒に居てくれるんだもの。

今日は私の誕生日。
彼、覚えててくれているかしら？

コンコン――

「入るよ。」

彼が来てくれたわ！
後ろ手に何か隠しているみたいだけど、何だろう？

「具合はどう？」

「うん、いつもどおりよ。」

彼の視線が私の手首に移る。
私の手首には彼がくれた時計が。

「水沢さん、せめて寝る時くらい時計を外したらどうです？」

冗談めいた口調で彼は私にそう言った。

「嫌よ、せっかく先生がくれた時計だもの。」
私も負けじと言い返す。
今更、こんな風に呼び合うなんて何か可笑しい。
私たちは恋人同士だっていうのに。

「今日は誕生日だったよね？ほら、これを君にあげるよ。」
彼は私に後ろ手に隠していたものをくれた。
それは赤い花束。
赤くて、綺麗な花束だった。

「わぁ、素敵！こんな綺麗な花、今まで見たこと無いわ！！」
‘今まで見た事が無い’自分で言ってみてから違和感を持った。
私は過去の記憶が無いのだから、見たことないのは当たり前。
だけど、この花は見た事が無い。
もしかして私は記憶を取り戻しているというの？

「その花はね、僕の故郷にだけ咲く珍しい花なんだ。君に良く似合うよ。」

「……ありがとう。」

細かい事なんてどうでもよかった。
今の現実で大満足だもの。
その感触を確かめるように、私は花束をギュッと抱きしめた。
甘い香りが病室中に広がる。

「そうだ、もう1つプレゼントがあるんだ。」
彼は私のベットの下から箱を取り出した。
彼ったら何時(いつ)の間にそんなところに隠したのだろう？
彼に促されるまま箱を開けてみると、其処に入っていたのは淡い薄紅色のワンピースだった。
「それも君にあげるよ。きっとよく似合うよ。」
「ありがとう、隆志さん。」
本当に嬉しかった。
この日のことをずっと忘れないでいようと心に誓った。
「そうだ、君の病気が治って退院したら、その花が咲く丘に行ってみないか？辺り一面その花が咲き乱れているんだよ？中心には桜の大木があってさ……」
「連れてってくれるの！？」
彼の突然の提案に、私は思わず聞き返してしまった。
その言葉は聞き間違えでは無い事が確認したかったし、何より彼の言葉に落ち着いていられなかったから。
「うん、約束するよ。」
彼は微笑んでそう答えてくれた。
「約束だよ？先生…」

約束だからね、私だけの先生……

case1－4：緋色

隆志さんから貰った薄紅色のワンピース。
彼が昨日話してくれた場所に行く時には絶対に着ていこうと決めたの。
だけどね、私…重病なんだよね。
何時死ぬか分からない病気なんだよね、多分。
だったらこのワンピースを着る機会は今しかないんじゃないかなって思う。
だから、彼が来る前にワンピースを着て、びっくりさせてやろうかな？
きっと驚くだろうけど、『似合う』って言ってくれるかな？
素早く着替えて、布団に潜り込む。
きっと、彼は喜んでくれるに違いない。

キィ――

病室のドアが静かに開いた。
彼が近づいてくる。
だけど彼の様子は何時もと何かが違う。
目の下に隈が出来て、何だか顔も青ざめているみたい。

「どうしたの？」

彼を脅かす事なんかより、彼の体調のほうが心配だった。
そんな状態でも彼は私に微笑んで見せた。

「何でもないよ、大丈夫。」

そう言って、彼は私の頭を撫でた。

「今日から薬を一つ追加するんだ。これは今飲んでくれるかい？」

彼は私に薬をくれた。

白い錠剤とコップに入った水を私は言われるがままに飲んだ。

――突然

意識が遠くなる。

視界がぼやけて…。

そんな中で、何か唇に柔らかいものが触れた気がした…。

ガチャ、ガチャガチャ――

目を覚ましたとき、私の体は鎖で固定されていた。

病室ではない、見知らぬ部屋の見知らぬ台の上。

「先生！先生！助けて！！」

私は咄嗟（とっさ）に彼を呼んだ。

何度も鎖を揺らして逃れようとするも私の力ではどうにもならない。

ガチャガチャガチャガチャ――

「誰か居ないの？ねぇ！誰か！！先生！！！」

キィ――

ドアが開いた。

其処に立っていたのは私の思い人。大切な彼。

きっと彼は私のピンチに駈け付けてくれたのだ。

「先生！！助けて！！これを外して！！」

そういっても彼は黙ったまま私を見つめていた。

どうして？

何で助けてくれないの？

「どういう…こと…？」

私の問いに彼は優しく微笑みを浮かべた。

「君は僕のことが好きかい？」

「えぇ…好きよ…愛してるわ…」

「僕には君が必要なんだ」

「えっ……」

こんな状況で彼が何を言っているのか理解できなかった。

「それって……どういう…」

『どういう意味なの？』そう言おうとした私の言葉を遮り彼は自らの主張を続けた。

「言葉のとおりさ。僕には君が必要なんだ。君の健康な臓器が――」

彼はそう言うなり白衣のポケットから注射器を取り出した。
目の前で起こっている事に思考がついていかない。
ただ、自分に身の危険が迫っている事だけは分かった。

「何も恐がる事は無いんだ。ほら麻酔もあるし痛くしないから。それに臓器を取り出されている君なんて誰にも見られたくない。大丈夫、実行するのは僕一人だから。」

狂気に満ちた言葉を更に彼は続けた。
大好きな彼の顔が何故か歪んで見える。
この時彼のことを初めて恐いと思った。

「いや…来ないで……い…だ……」

「大丈夫、この針さえ刺されば、痛みも何も君は感じなくなるんだから！！」

「イヤーーーー！！！」

私の悲鳴は彼には届かず、私の皮膚に針が刺さった。
意識が遠くなる。
感覚がなくなってゆく。
だけど、自分の腹から生温かいものが流れている事だけははっきりと感じた。

―ドウシテ…センセイ…ド…シテ…―

この世界だけで十分だったの。
この病室だけで私の世界は十分だった。
そう、貴方がいてくれるのなら、
外の世界なんて知りたくなかったのに…

外ノ世界ナンテ……

case2－1：薄色

私は、杉村隆志に惚れている。
そう感じたのは彼がこの総合病院に入ってきて間もなくの事だった。
私より5歳年下の彼は、大人びた少年と言う感じだった。
しかし、そんな彼に私はいつの間にか恋をしていた。

看護婦である私は医者である杉村の傍にいることが多かった。
杉村と最も親しい存在はこの私だと自負していた。
そうあの日までは――

その日の夜、私は夜勤で夜遅くまで残っていた。
この日は偶然にも彼も病院に残っていたので仕事と言えども何となく嬉しかった。
でも残酷にも運命の時間は来てしまったのだ。

「これから急患をそちらの病院へ搬送します」

そう救急隊員から電話がかかってきたのは丁度12時だった気がする。
暫くして病院の前に救急車が止まった。

「相模さん！すぐに玄関の方へ！」

杉村に急かされ、救急車が止まっている方の玄関に向かった。
私と杉村が其処に着いた時、何人かの看護婦が集まっており、その

患者は救急車から降ろされたところだった。
寝巻き姿の少女。
腹部から出血し、首にはチアノーゼが出ている。
衣服もよく見ると、焦げている。
ストレッチャーに乗せられた彼女はそのまま治療室へと運び込まれた。

「一体、何があったんでしょうか？」
私は気になって救急隊員聞いてみた。
「近所の人から家事だと言う通報がありましてね現場に向かったんですけど、どうやら一家心中をしたみたいです。」

「一家心中…ですか？」

「ええ、消防隊員が駆けつけた時には少女しか息をしていない状態だったらしいですからね。母も、父も、姉も、炎が回る前には死んでたみたいです。」

「そうなんですか。」

こんなご時世だ。
一家心中なんて珍しい話ではない。
だけど、私はこの時から嫌な予感を抱いていた。
そう、彼のあの表情。
ストレッチャーに乗せられた少女を見たときに、一瞬だけ見せたあの表情。
あの目は患者を見る目とは何処か違っていた。

まるで、私が彼を見るような目…その表情は一瞬でいつも通りとなってしまったけれど。

少女…水沢正美は検査の結果、肺尖カタルが見つかったらしく入院する事になった。
私の憧れの彼は、そんな少女にますます夢中になっていった。
それを裏付けるかのように、彼は少女の病室に殆んど看護婦や自分以外の医者を近づけなくなっていた。

健康な看護婦と、病弱な少女……きっと私には勝ち目は無い。

ある日の彼は、プレゼントを持って病室に入っていった。
ある日の彼は、花束を持って病室へ。
周りの医者も看護婦も彼の行動に気付き、非難をしていたが彼はそんな事お構い無しの様子だった。
彼の全ては彼女なのだ。
周りがどうであろうとも、水沢正美だけが彼の全て。

だけど、今思えば彼は悩んでいたのだと思う。
職業と恋の狭間で板ばさみ状態だったのだと。

そして分岐点になった例の日は、刻々と近づいてきた。

case2－2：紫色

あの日も…分岐点となったあの日も私は夜勤だった。
１１時と言っても粗（ほぼ）１２時近くに病院内の見回りを始める。
１階、２階と見回りを済ませて異常はないので、これで完了…のはずだった。

が、あの日は何故か地下室が異常なまでに気になった。
地下室に在ると言えば霊安室と解剖室くらい。
解剖室は、この病院が戦時中に造られたもので人体実験を行うために造られたという噂だ。
当然のことながら現在では使用禁止になっている。
だけど、私は解剖室がどうしても気になって仕方なかった。
今まで気にしたことなどなかったというのに。

カツン、カツン――

好奇心に押され、私は地下への階段を一歩づつ下りた。
その部屋は霊安室より奥にあった。
ドアノブにはチェーンがかかっているのだが、何故かそれが切れている。
中に誰かいるということだろうか？

キィ――

恐る、恐る私はドアを開けた。
其処には――

其処には、私の良く知っている人が立っていた。
手は真っ赤に染まっているが、それは紛れも無い彼、杉村隆志である。
彼は死体から一所懸命に臓器を取り出していた。
その死体は、彼の最愛の人物であるはずの水沢正美だった。

私は自分でも知らない間に震えていた。
その震えは恐れより、喜びからくるものだった。
なんせ、目障りだった水沢正美は消えたのだから！！

「フフ…ククク…アハハハハッ！！」

知らずのうちに自分の声とは思えない笑い声が己の口から漏れていた。
その声を聞いた彼は驚いたのか肩をビクリと震わせ、こちらを向いた。
メスを持って、こちらへゆっくりと近づいてくる。
彼は私の体を壁に押し付け、喉元にメスを当てた。

「見てしまったんだね、誰にも見られたくなかったのに。」

彼の表情は悲しそうでもあり、嬉しそうでもあった。
哀愁、歓喜、狂気、その全てを帯びた表情をしていた。

「フフフ、大事にしていた彼女から臓器を取り出すなんて何処に売るか知らないけど、初めからこのつもりだったの？」

血を見ても、死体を見ても、臓器を見ても私は驚かない。
一々驚いていては看護婦は務まらないから。

それに、この時の私は喜びのほうがどんな感情よりも勝っていたのだ。

「まさか、愛していたさ。だから誰にも彼女を見せず終わりにするつもりだった。君はとんだ誤算だったよ。相模薫。」

彼の血だらけの左手が私の頬に触れる。
その血は水沢正美のもの。
私は正直不快だった。彼女の血がべったりと頬に付くのが許せなかった。
でも同時に快感でもあった。その血は彼女が死んだことを明確に意味しているから。

「さて、見られてしまった以上どうしたものか…」

彼はさらにメスを強く私の喉に当てた。
そして意地の悪い笑みを浮かべて私にこう言ったのだ。

「この後の処理を手伝ってくれるかい？薫。」

そうして私と彼は死体の処理を始めた。
臓器は即座に冷凍保存し、用済みとなった体を細かく解体し、ケースに一まとめにする。
彼が死体を何処かに捨てに行っている間に、私は解剖室に残された多量の血痕を跡形もなく拭取った。
彼女が其処に存在していた証を跡形もなくこの世から消し去って……

あの日から、水沢正美の居た２０３号室は呪われた病室となった。
そこに入院した患者は、どんな軽症の患者であろうと必ず脳死状態になる。
臓器を取り出すには、最も良い状態に。
私と彼はそれを利用して莫大な金を稼いでいる。
あの後、私と彼がどういう関係になったのかは言うまでもないことだ。

今の私は欲しいものは何でも手に入るし、充実した毎日を送れている。
罪の意識なぞこれっぽっちもない。

罪が何なのかも分からない。
何故私が罪なぞを感じなければならないのか？

――だが
私があの日、彼の手伝いをした時間、その時間に鏡を見ると其処には居るのだ。
私の後ろにぴったりとくっついた彼女が。

―私ノ…先生ヲトラナイデ…―

case3－1：　草色

僕はとある片田舎で生まれた。
古い仕来りが溢れるこの村が僕は嫌いだった。
実家の農業を継ぐなんてもってのほかだった。
早く都会に行って、一儲けしてお金持ちになるのが幼い時からの夢だった。

だから、僕は親の反対を押し切って都会の医科大学へ通い、医師免許を取得したのだ。
昼は勉学に励み、夜は仕事に励む生活は楽ではなかったけれど、その分医師免許を取得できた時の喜びは大きかった。

大学卒業後、僕は大学近くの総合病院に雇われた。
いくら医者とは言えどもまだ見習いのような感じで、安い給料しかもらえなかった。
それでも何時かは、この立場から抜け出せると思い僕は一生懸命働いた。
それに何人かの看護婦たちも僕を支えてくれた。

逆にそのことがいけなかったのだろうか？
僕は先輩の医者にも無視され、院長からは目の上のたんこぶだと思われていた。
この病院はコネのある人が殆んどで、何のコネもない人が実力を付け上に上がろうとするのは気に喰わないらしかった。

そんな状況で一年が過ぎた。
よく自分でもこの状況に耐えてきたと思った。
それはきっと看護婦の相模薫が僕の事を支えてくれたおかげだろう。

彼女は面倒見がよく、僕にとっては姉のような存在だった。
両親の反対を押し切って家を出てきた僕にとって唯一心が許せる存在でもあった。

さらに半年後、僕はやっと「見習い」というレッテルをはがされ、一人前の医者としてやっていけることになった。
周りは僕のことを認めてくれたのだろうか？
でも油断は出来ない。問題を起こせば、鬼の首を取ったかのように何かされるに違いないから。

そんなある日、夜勤をしていたところに一人の急患が運ばれてきた。
所々焦げた寝巻き姿で、腹部から出血し、首にチアノーゼが出ている……この生と死の境に居る少女に僕は何故か強く惹かれた。
こんな状況の少女に一目惚れなど自分でも考えられない事だった。

少女を治療室に運び、治療を始める。
救急隊員によると一家心中をした中で一人だけ生き残ってしまったらしい。
腹部の出血と、首のチアノーゼは恐らく彼女を殺そうとして刺したり、首を絞めたりした跡だろう。
でも、彼女の素性なんてどうでも良かった。
ただ彼女を助けたい一心で僕は彼女の治療をした。

「良かった、気が付いたんですね。水沢さん。」

意識を取り戻した彼女に私はそっと話しかけた。
医者として当然の心遣いだか、僕にとってはそれより深い意味を持

っていたと思う。

「あ、貴方は？」

初めて聞いた彼女の声は小鳥の囀（さえず）るような可愛らしい声だった。

「僕は君の主治医の杉村です。」

そういうなり、僕は彼女の手首を優しく掴んだ。
もちろん彼女の脈を計るために。
この時ばかりは、自分の医者という立場が素晴らしく良いものに感じられた。

「うん、脈は正常だね。あとは検査の結果次第だよ。じゃあ、僕はこれで。何かあったら手元のナースコールで呼ぶといいよ。」

僕は彼女ににっこりと微笑みかけ、その場を去ろうとして後ろを向いた。すると…

「あ、あの！」

彼女が僕を呼び止めた。
それは僕にとっても不意打ちで、少しだけ驚き、照れくさくなった。

「あの、此処って何号室なんですか？」

そんな突拍子のない質問が僕を更に驚かせた。
きっと彼女も心細いのだろう。
過去を失い何も思い出せず、思い出したところで家族を失っている事に変わりはない。

何の躊躇いもなく家族を捨てて家を出てきた自分と彼女は根本的に違う。
私から見れば過去を知らない、持たない彼女は純粋で、それに引き換え僕は汚れている。
自分に無いものを持っている彼女に惹かれるのは当たり前の事だったのかもしれない。

「ここは２０３号室ですよ。」

僕は彼女にもう一度微笑みかけ、今度こそ病室を後にした。

彼女の病状は記憶喪失という事さえ除けば、いたって正常だった。
彼女の親戚と話がつけば今日にでも退院出来る状態。
ただ僕はそんな事をしたくなかった。
彼女を…水沢正美を手放したくない、そんな衝動に駆られた。

そのためには――
僕はカルテを書き換えた。
「記憶喪失」プラス「肺尖カタル」と。
そうして彼女にそのことを告げる。
僕の嘘に彼女は少し戸惑ったような表情を見せたが、その顔は何処となく嬉しそうだった。

case3－2：薄墨色

「おはよう、水沢さん。具合はどうですか？」

翌日、私は朝一で彼女に会いに行った。
一晩がとても長く感じられ、一刻でも早く彼女に会いたかったのだ。

「はい、大丈夫です…。」

彼女は俯いたままそう答えた。
彼女の俯いて見えない顔がどうなっているのか知りたかった。
彼女に触れたかった。

ふわっ――

僕は気が付くと無意識のうちに彼女の頭を撫でていた。
彼女の髪は黒く、そして柔らかい。
彼女は一瞬だけ顔を上げたが、また俯いてしまった。

「大丈夫、きっと良くなりますよ。」

愛らしい彼女を残し、私は病室を後にした。

彼女はとても可愛らしい。
僕にとって天使のような存在で、純真で無垢だ。
一刻も早く、彼女を自分だけのものにしたかった。
誰にも奪われたくない。狂おしいほど愛しい。

毎日毎日、必要以上に彼女の元へ向かう。

最初のうちは周りの目を気にしていた。
医者が患者に特別な感情を抱くなど、よろしくないことだ。
僕の寝首を掻こうとしている連中だって居るのだから気を付けなくてはならない。
でもそんな気持ちも、日が経つに連れて薄れていった。
頭の中は彼女の事しか考えられなくなっていった。
だから、僕は思いを伝えることにした。

「君にプレゼントがあるんだ。」

僕は唐突にそう切り出し、彼女に小さな箱を渡す。
彼女は箱にかかっていたリボンを丁寧に解き、蓋を開けた。
箱の中に入っていたのは赤いベルトの時計。
色の白い彼女には赤系の色が似合うと思い、僕はこの時計を選び、プレゼントしたのだ。
彼女の手首に優しく時計を付けてやる。

「私が貰ってもいいんですか？」

「はい。それに僕…ずっと貴方に言わなきゃと思ってたんです。」

「言わなきゃいけない事…？」

僕は気付かれないように深呼吸をした。
なるべく真剣な顔をして話を切り出そうと思ったが、恥ずかしさの余り自分で思うような表情が出来ない。きっと変な顔をしていたに違いない。

「僕は、水沢…いえ、正美さんのことが好きです。付き合ってもら

えませんか？」
答えは、イエスかノーか……僕はとても不安だった。
しかし、一拍置いた後、彼女は急に抱きついてきた。
「わっ！」
突然の事に、僕は声をあげた。
彼女はそのまま僕の耳元で、
「隆志さん…私も好きです。」
と囁いた。
そして彼女は僕を強く抱きしめる。
恥ずかしくて、照れくさくて、如何して良いか分からないので彼女を抱きしめ返し、
「だから、早く元気になってくださいね？」
と言った。
彼女はいたって健康だし、元気になれも何も無いのだが。
本当の意味での回復は「記憶を思い出すこと」を意味している。
そうなった場合、彼女との関係、彼女自身もどうなってしまうか分からない。
それだけは、どうしても避けたかった。
でも今は彼女を自分のものに出来たのだからそれで良い。
彼女の病室から出た後、院長に呼び止められた。
僕は彼女との関係がバレて其れについて何か言われるのかと身構え

た。

しかし、院長の口にした言葉はそれとはまったく別の事だった。

「貴方のお父さんが亡くなったそうです。」

case3－3：臙脂色

『貴方のお父さんが亡くなったそうです。』

院長からその言葉を聞き、僕は慌てて支度をして病院を飛び出した。
あの日、家を飛び出してから勘当同然だった家に戻るのは少しばかり気が引けたが、そんな事を考えている場合ではなかった。
自分の親父が亡くなったのだ。
そんなに歳を取っている訳ではなかったはずなのに。
確かめたい気持ち半分、受け入れたくない気持ち半分であった。

実家に着くと、其処にはすでに何人かの人が集まっていた。
忙しそうに皆、テキパキと動いている。
僕はその中から母の姿を見つけようと目を凝らした。
しかし――
母は何処にも居ない。
近所のお寺にでも行っているのだろうか？

「あら、隆志くんじゃない。」

色々と考えを巡らせていると叔母さんに声をかけられた。

「お久しぶりです。叔母さん。ところで母は……」

「え？知らないの？由希子さんならこの村の病院に――って、隆志くんちょっと何処に行くの！？」

僕は叔母さんの話の途中で病院に向かって無我夢中で走り出した。

この村の病院は此処からそう遠くはない。
父親の死も、母親の病気も認めたくは無い。
病院に着くなり看護婦に母親の病室を聞き、すぐさま其処に向かった。
其処にはベットに横たわる母の姿が。
母は全体的に憔悴(しょうすい)していた。以前の健康な姿など見る影も無いほどに。

「もしかして、杉村さんの息子さんですか？」
後ろから誰かに声をかけられた。
振り向くとそこには白衣を着た男が立っていた。

「私は医院長の草津と言います。」

「どうも、お世話になっております。ところで母の病気はどういったものなんですか？」
僕自身も医者だが、こんなに酷く憔悴してしまう病気など実際に見たことが無かった。

「非常に言いにくいんですがね、心筋症、拡張型かと。」

心筋症は原因不明の難病である。
拡張型は心臓の収縮力が弱まり、心不全の症状や不整脈でその病気に気付くことが多い。
肥大型と比べ、拡張型の方が重症でうっ血性心不全や重症な不整脈が起こりやすい。
母がこんな難病にかかっているなんて……今まで気付かなかった自

分が悔しかった。

「こんな病院ですし、ここでやれるだけの事は全てやりましたが、結果はご覧の通りです。しかし、もっと大きな病院に移しても残念ながら結果は同じかと思われます。」

そんな事言われなくても分かっていた。
こんな状態になるまで何も出来なくても自分だって医者なのだから。
そう、こうなってしまった場合助かる可能性がある方法といえば――

「もう、こうなってしまうと心臓移植しか方法はありませんね。ただしドナーが見つかればですけど。」

そう、それしか方法は無いのだ。
しかし、ドナーを待っている人は何千人と居る。
母親にドナーがまわってくる確率などゼロに等しい。
それに、仮にドナーが来たとしても、この病院での手術は設備的に不可能だ。
他の病院に移す際に、母の体力が持つかどうか…。

「隆ちゃん…？」

今まで眠っていた母がうっすらと目を開けた。
久しぶりに聞く母の声に、こんな状況でも少しだけ安堵した。

「隆ちゃん…来てくれたのね…」

私は細くなってしまった母の手を強く握った。

「お袋！頑張るんだ！絶対に僕が何とかしてやるから！！僕のいる

病院へ来れば設備も整ってるから何とかなる！だから頑張るんだ！！！」

母を死なせたくは無かった。
僕は母に面倒をかけてばっかりで何もしてあげらていない。
父についてもそうだ。僕は何て親不孝者なのだろう。

「隆ちゃん…」

母は僕の手を弱々しくそっと握り返してきた。

「隆ちゃん…立派になったわねぇ。でも私は、この地で生ま育ったから最期まで此処から離れたくないの。最期くらいはこの地で迎えたいの…」

「最期だなんて言うなよ…！」

「ねぇ、隆ちゃん。一つだけお願いがあるの…」

「何だ？何でも言ってくれ。」

「この病室から見える景色はいつも…同じ…。だからね、あの花が見たいの…よく隆ちゃんが小さい頃に一緒に行った…あの丘の…あの花が……」

「わかったよ。お袋…」

僕は脇目も振らずに病室を飛び出し、一目散に駆け出した。
それが母の望みだというのなら今からでもいい、少しでも親孝行になることをやってやりたい。

あの丘は病院から５００メートル位のところにある。丘というよりは小さい山みたいな感じの場所だ。
母親が欲しがっている花は今頃が丁度時季だから咲いている筈。
そんなことを考えながら急いで目的場所まで小さな山を駆け上がる。

頂上に着く直前で、木や雑草だった景色が急に開けた。
そこには辺り一面に母が大好きだった赤い花が咲き乱れていた。

ぶわっ――

強い風が吹き、花弁（はなびら）が舞い上がる。
咲き乱れている赤い花の中心には桜の木がある。その木が立っている場所は頂上に当たる。
今は丸裸の桜の木が、舞い上がった花弁によって花が咲いているかのように見えた。
昔は此処に、母と二人でよく花を摘みに来たものだ。
この赤い花はこの村にしか咲かない花である。
母はこの花が本当に大好きで時季になると毎日家に飾っていた。
あの頃が懐かしくて、今となっては遠い昔で…それが切なくて涙が出そうになった。

僕は手近にあった花を5本程摘み、花を大事に抱え急いで病院に戻った。

「ほら、お袋が大好きな花だよ！」

僕がそう呼びかけると母は瞑っていた目を薄っすらと開けた。

「隆ちゃん…取ってきて…くれたのね…」

苦しそうに、途切れ途切れに言いながら、母は僕の持っていた赤い花にその細い手を伸ばした。

「あり…が…と……」

母の手は花にとどかず、ゆっくりと下に落ちた。

case3－4：鶯色

『あり…が…と……』

母のその言葉が頭から離れなかった。
僕は礼を言われるような人間ではない。
僕は医者でありながら死にゆく母に何もしてあげられなかったのだから。
両親の葬式の事は良く覚えていない。
虚ろな心のまま行(おこな)った葬式は記憶に残らなかった。

僕は今、あの丘に来ている。
赤い花は相変わらず見事なまでに咲き乱れ、風に揺れている。
僕は何故か花を摘んだ。母はもう居ないのに。
花を摘んでいる手に涙が落ちる。手元は目が涙で翳(かす)んでよく見えない。
無心に花を摘み続け、いつの間にか僕は抱えきれないほどの花を持っていた。

花を抱えて丘を下り、母と父の眠る墓に花を供える。
目を瞑り、手を合わせて僕はその場を去った。

勤め先の病院に付く頃にはすっかり辺りは暗くなっていた。
荷物と赤い花を抱えて病院内にある自室へと向かう。
どんなに落ち込んでも起こってしまった事はしょうがないし、時間を戻せるわけも無い。
部屋に入り、電気を点ける。後ろ手でドアを閉める。

一つ一つの動作が面倒臭いほど僕は疲れきっていた。
何とか気を紛らわせようと、赤い花を抱きしめると甘い香りがした。
故郷の香り…。
幸せな昔の香り…。
目を瞑ると母と父の記憶が蘇る。
どうしても気が紛れないと分かった僕はもう寝ることにした。
花瓶に花を活け、それで僕の長い忌引は終わった。

翌日から、いつものように仕事を再開した。
吹っ切れた訳ではないが、幾らか気持ちは落ち着き、何時も通りに過ごせるようになった。
彼女はというと、僕の不在が長かったため心配していたらしい。
心配をかけてしまった分、何かお詫びをしてあげなければ。
それに明日は彼女の誕生日だ。
彼女を喜ばせるようなプレゼントを用意しよう。

僕は仕事が終わると、早速彼女にプレゼントを買いに行った。
近くのデパートの洋服売り場で目に付いたのは淡い薄紅色のワンピース。
きっと彼女によく似合うはずだ。
僕はそれを買い、綺麗に包んでもらった。

次の日の早朝、僕は彼女にプレゼントを渡しに行ったが彼女は眠っていた。
また自室に持って帰るのも面倒だし、他の医者に見つかると不味いので彼女の寝ているベットの下に隠しておく事にした。
ふと彼女の腕に目をやると、僕のあげた時計をしていた。

寝る時くらい外せばいいのにと思いつつも、僕はそれがとても嬉しかった。
今の僕にとって彼女こそが心の支えなのだ。
そうだ、あの花も彼女にあげよう。
いつか一緒に僕の故郷に行く事もあるだろう。
母の好きだった花だ、きっと彼女も気に入ってくれるに違いない。

病室を出て、いつも通りに仕事をこなし、夕方にもう一度彼女の元に向かった。
手には故郷の赤い花。

コンコン――

「入るよ。」

気付かれないように花を背に隠し、病室に入る。

「具合はどう？」

聞いても意味の無い事だと分かりながらも、癖で聞いてしまう。

「うん、いつもどおりよ。」

彼女は今も僕のあげた時計をしていた。

「水沢さん、せめて寝る時くらい時計を外したらどうです？」

「嫌よ、せっかく先生がくれた時計だもの。」

冗談とはいえ、こんな風に呼び合うのは違和感を感じた。

僕達は恋人同士だというのに。

「今日は誕生日だったよね？ほら、これを君にあげるよ。」

僕は隠し持っていた花を彼女にあげた。

「わぁ、素敵！こんな綺麗な花、今まで見たこと無いわ！！」

彼女のその言葉が少しだけ引っかかった。

“今まで”？

彼女は記憶を取り戻しているのだろうか？

「その花はね、僕の故郷にだけ咲く珍しい花なんだ。君に良く似合うよ。」

自分の僅かな焦りを悟らせまいと、出来るだけ落ち着いた声で言った。

「……ありがとう。」

彼女は嬉しそうに花束をギュッと抱きしめた。

花の甘い香りが病室中に広がる。

彼女は何時もと変わらない。考えすぎだろうか？

「そうだ、もう1つプレゼントがあるんだ。」

僕は彼女の寝ているベットの下から今朝方隠しておいたプレゼントを取り出し、彼女に渡した。

そして箱を開けるように促した。

彼女は丁寧に箱を開け、中のワンピースを取り出した。

「それも君にあげるよ。きっとよく似合うよ。」

「ありがとう、隆志さん。」

嬉しそうににっこりと微笑む彼女が愛らしくて、もっと彼女を喜ばせてあげたくなった。

「そうだ、君の病気が治って退院したら、その花が咲く丘に行ってみないか？辺り一面その花が咲き乱れているんだよ？中心には桜の大木があってさ……」

「連れてってくれるの！？」

彼女は僕の突然の提案に驚き、そう聞き返してきた。

驚いた顔も愛らしい。

「うん、約束するよ。」

そんな彼女を見て、僕は微笑してそう答えた。

彼女の嬉しそうな顔を見ていると僕まで嬉しい気持ちになる。

「約束だよ？先生…」

彼女の病室から出て自室に帰る途中、後ろから肩を叩かれた。

「ちょっと杉村くん。話があるんだけど――」

振り向いた先に立っていたのは険しい顔をした院長だった。

ｃａｓｅ３－５：潤色

院長に呼び止められて向かった先は院長室。

「まぁ、そこに座りなさい。」

院長は僕に向かって威厳をもった声でそう言った。
僕は言われるがままに院長の座っている椅子の向いにあるソファーに腰を下ろした。
暫し沈黙。
とても居心地が悪かった。

「さて…私が君を呼び止めた理由はだな――」

院長が重々しく口を開いた。
きっと言われるのはあの事だろう。
しかし、院長の言葉は意外なものだった。

「当病院の院長の跡継ぎについてなんだがね。見ての通り私はもう歳だ。そろそろ院長を若い者に継がせたいと思うんだが、私は独身だし跡を継がせるような息子も当然の事ながら居ない。」

「はぁ…」

「そこでだな、当病院に見習いとして入った頃から良い働きぶりだった君に院長を任せようと思う。」

別に僕だって好きで一生懸命働いていたわけではない。
コネを持った人たちを越したくて、自分を周りの医師達と同じ目で

見て欲しくて人の倍働いていたのだ。
多分、院長や其の他の医師達は、僕を目の上のたんこぶ扱いした事を少なからず悪いと思っていて、あるいは僕がそのことに対して事を大きくする前に、ここで恩を着せたいのだろう。
それともただ罪滅ぼし的なことがしたいだけなのか…？

「しかし、だな。この病院は問題がある。それは私の落ち度が原因だ。だが、この病院の問題と同じように、君にも少し問題があるようだが――」

僕はドキりとした。
やっぱり院長はあの事を咎めるつもりで僕を此処に呼んだのだ。

「はい、言われずとも…分かっています。」

僕は腹を括った。
もうこの先に何を言われても動揺しない、そう決心した。

「まぁ、次期院長候補の君にそれは問題の気がするがまあいい。先も言ったとおりこの病院は医師の数に対して患者の数が少ないために、苦しい状況にある。それを立て直したら全てを水に流そう。」

またもや意に反した言葉。
動揺しないと決心した僕ではあったが、彼女との関係を認め、そのことを水に流すというのであれば、僕は何でもしようという気になった。

「きっと立て直して見せます。ですから――」

「その覚悟は本物だな？」

「はい！！」

院長は満足そうにニヤリと笑った。

「さて、では立て直す方法を話そう。これは君にしか出来ない事だ、良く聞きたまえ。」

院長の声が急に小さくなった。

「立て直すために当病院は裏世界と手を組む事にした。この病院のスタッフ全員を失業させるわけにはいかないからな。裏もこちらが病院だと知ると快く手を差し伸べてくれた。何故だか分かるか？」

僕は首を横に振った。

「人の臓器はドナーが始まって以来、高額で取引される。裏はそれを期待したのだ。臓器さえくれれば相当な額の現金を用意すると。しかし、我が病院の入院患者にはドナーに適した者は居ないし、居たとしても家族は了承してくれないだろう。」

「何が言いたいんですか…？」

嫌な予感がした。

「ただ、こんな病院でもドナーに適した患者が一人だけ居る。記憶も無ければ、身寄りもなし。どうだ、打って付けだと思わんかね？２０３号室の患者は。」

院長は意地の悪い笑みを浮かべ僕を見詰めた。

そんな事出来る筈がない。
彼女を、水沢正美をドナーになんて！！

「貴方は、この病院の為に彼女を犠牲にしろというのか！？」

「ふふん、それは君のエゴだよ。では君はドナーを待っている何千人もの人たちを見捨てて彼女を生かしておくというのかね？彼女一人から幾つの臓器が取れると思っている？腎臓、肝臓、心臓、肺……細かいことを言うなら目の角膜だってそうだ。それによって助かる人が何人もいるのだぞ？」

「そのために生きている人を殺せというのですか！？」

「今更何を言っている？本来ドナーとなる人は脳死状態の人が多いが、脳死とは言え、生きているのだよ？生きている患者を殺し、ドナーにするということは――たとえ意識の有無があるにせよ、やっていることは一緒なんだよ。それに……」

院長は僕の肩にポンと手を置くと耳元で、

「君には分かると思うのだけどね。ドナーが見つからずに死んでゆく者の気持ち、遺された者の気持ちが。」

と言った。
それは悪魔の囁きのように僕の心を捉(とら)えた。
死を目の前になす術も無く死んでいった母の姿が蘇る。
その体は以前の面影が無いほどに痩せ細り、苦しそうに呼吸をし、
「死」というナイフを突きつけられたかのような状態の母の姿。
大好きだった花にその手は二度と届く事は無かった。
医者と言う立場でありながら何もしてやれなかった自分への苛立ち。

自分の無力さへの絶望。
様々な感情が僕の心を雁字搦(がんじがら)めにした。
その為か、院長の提案に対し自分の意思を伝える事は困難となった。
『自分はどうしたいのか？』
今ではそれが分からない。
以前だったら簡単に答えを出せたものが、今となってはその逆になっていた。
彼女の姿と、母の姿が不規則に走馬灯のように浮かぶ。
眩暈、吐き気、僕はその場にしゃがみこんだ。体に力が入らない。

「答えは明日の早朝までに頼むよ。明日の夜遅くに臓器を受け取る人が来るからな、早ければ早い方がいい。結論が出た時点で決行してもらう。まぁ、良い返事を期待しているよ。杉村次期院長？」

嫌味ったらしくそう言うと、院長は部屋から出て行った。

case3－6：漆黒

コンコン――

翌日、早朝に僕は院長室の扉を叩いた。
中から、院長が扉を開け「ああ、君か。」と言うなり僕を部屋に招きいれた。
昨晩と同じようにソファーに腰を下ろす。

「さて、返事の方は…」

僕の心は決まっていた。
僕は小さな声で院長に答えを告げると、彼は満足そうに笑った。

「ただし、条件があるんです。」

僕が提案した条件も彼は快く受け入れてくれた。
僕はその後、院長室を後にして彼女の病室に向った。

彼女の病室の前で軽く深呼吸をし、扉を開ける。

キィ――

扉の開く音は、院長室の扉に比べて軽い音だが、僕にとってはその音も何処か重みのあるものに聞こえていた。
一歩、また一歩と彼女に歩み寄る。

「どうしたの？」

彼女は僕の顔を見てそう言った。
僕はそんなに具合の悪そうな顔をしているのだろうか？

「何でもないよ、大丈夫。」

僕は微笑んで、彼女の頭を撫でた。
彼女は何時もと変わらぬ様子で僕を見詰めてくる。

これから何もかもが変わると言うのに。
何の穢れも知らないまま死ぬのならそのほうが良い。
僕は白衣のポケットにある薬を取り出した。
何故か手が震える。

「今日から薬を一つ追加するんだ。これは今飲んでくれるかい？」

その薬とコップに入った水を、僕も何時もと変わらぬ様子で彼女に渡す。
彼女は促されるままに薬を飲んだ。
そして暫くして意識を失った。

これから彼女は人の命となる為に自分の命を落とす。
彼女の体は、臓器は、もう彼女だけのものではない。
もちろん、僕のものでもなくなるのだ。
それだけが悲しくて、僕は彼女に口付けをした。

この瞬間から、彼女は僕のものではなくなった。
彼女をストレッチャーに乗せ、怪しまれないように白い布をかぶせ、カラカラと音を立て、朝早いため人気の無い廊下を左に、右にと曲

がりエレベーターに乗り、地下の解剖室へ。
――と、
その部屋の前に何故か院長が立っていた。
「もう始めてしまうのかね？」
僕は静かに頷いた。
臓器を取り出すなら文句は無いはずなのに院長の顔はどこか不満そうだった。
「残念ながら、うちには取り出した臓器を保存しとくような道具は無いんだよ。だからもう少し遅く…引き取り先が来る直前に事を進めて欲しいんだがね。」
「やってみます…麻酔も夜まではもつでしょうし。」
僕は院長の脇を通り過ぎ、彼女と一緒に解剖室へ入っていった。
解剖室…その中はとても殺風景だった。
しかし、その部屋はどこか異様な雰囲気に包まれていた。
壁には血痕が飛び散り、そのまま放置され、床にも赤い染みが広がっている。
手術を行う台の上には、何時のものだか分からない錆びた鎖が置いてあった。
僕は彼女にかけてあった白い布を取り、そっと抱え上げて台の上に移した。

先程は気付かなかったが、彼女は僕のあげたワンピースを着ていた。
僕が想像したとおり彼女にそのワンピースはとても似合っていた。
僕は嬉しくなった。

だって彼女の最期に着ている物がこのワンピースなんて！！
しかも、この姿を目に焼き付けることが出来る！
彼女はこの姿で僕の中で永遠に生き続けるんだ！！！

僕は時間になるまで此処に彼女と一緒に居ることにした。

case3－7：闇

時は来た。
そろそろ摘出手術を始めても良い時間だ。
僕は殺人を犯すのではない。
困っている人を…臓器を欲している人の為に一仕事するのだ。
そう、これは人助けだ。
――と、その前に彼女の麻酔が切れるかもしれない。
僕は麻酔を取りにいったん部屋を出た。

ガチャ、ガチャガチャ――
「先生！先生！助けて！！」
ガチャガチャガチャガチャ――
「誰か居ないの？ねぇ！誰か！！先生！！！」
僕が戻った頃には彼女の麻酔が切れたらしく、鎖の音と彼女の悲鳴にも似た助けを求める声が廊下中に響き渡っていた。
キィ――
僕は静かにドアを開けた。

「先生！！助けて！！これを外して！！」

彼女は僕の姿を見るなり助けてと必死に懇願してきた。
それは出来ない話だ。
これから君は皆を助けるために働いてもらうんだから。

「どういう…こと…？」

そして君は僕の心の中で永遠に生き続けるんだ。
体は皆のものだけど、水沢正美という存在は僕だけのものになる！！
それが不思議と嬉しくて笑みが漏れてしまった。

「君は僕のことが好きかい？」

それは愚問だ。

「えぇ…好きよ…愛してるわ…」

君なら必ずそう言ってくれると思っていた。

「僕には君が必要なんだ」

そう、君が必要なんだ。

「えっ……」

その驚いた表情も、

「それって……どういう…」

戸惑った表情も、

「言葉のとおりさ。僕には君が必要なんだ。君の健康な臓器が――」

臓器さえ他人に譲れば君は完全に僕だけのものになる！！

僕は白衣のポケットから注射器を取り出した。

「何も恐がる事は無いんだ。ほら麻酔もあるし痛くしないから。それに臓器を取り出されている君なんて誰にも見られたくない。大丈夫、実行するのは僕一人だから。」

そう、君のこんな姿を見るのは僕一人だ。

それが僕が院長にお願いした事。

彼女の臓器摘出は僕一人でやると。

こんな彼女の姿は誰にも見られたくなかった。

「いや…来ないで……い…だ……」

彼女の怯える表情も愛しかった。

「大丈夫、この針さえ刺されば、痛みも何も君は感じなくなるんだから！！」

「イヤーーーー！！！」

僕は彼女の白い腕に注射針を刺した。

その後間も無くして彼女は意識を失った。

僕は彼女の腹部を切開し、臓器を取り出す作業を始めた。

彼女の温かい血で手が染まる。

狂気にも似た喜びが僕の中からこみ上げてきた。
僕は余すところ無く君を愛していると胸を張って言えるから。
血液も、臓器も、肉片も、全て僕のモノ――

「フフ…ククク…アハハハハッ！！」

突然背後で声がした。
僕は驚きながらも後ろを振り向くと、其処には相模薫が笑いながら立っていた。
見られてしまった！誰にも見られたくなかったのに！！
僕は彼女に歩み寄り、体を壁に押し付け、その喉元にメスを当てた。

「見てしまったんだね、誰にも見られたくなかったのに。」

「フフフ、大事にしていた彼女から臓器を取り出すなんて何処に売るか知らないけど、初めからこのつもりだったの？」

彼女はこの状況を見ても顔色一つ変えなかった。
彼女はずっと口元に笑みを浮かべていた。

「まさか、愛していたさ。だから誰にも彼女を見せず終わりにするつもりだった。君はとんだ誤算だったよ。相模薫。」

血に染まった手で彼女の頬に触れる。
彼女が何を考えているかは分からなかったけど、一つだけ明確な事があった。
彼女は僕と同じ、この状況を喜んでいる。

「さて、見られてしまった以上どうしたものか…」

一人くらい手伝いが居ても構わない、か。

「この後の処理を手伝ってくれるかい？薫。」

その後は2人で水沢正美の処理を始めた。
臓器は即座に冷凍保存し、用済みとなった体を細かく解体し、ケースに一まとめにする。
そして僕は死体を葬りに行き、彼女には残された血痕を拭いてもらった。
そして、臓器を受取人に渡し、僕の長い一日は終わった。

あの日から、水沢正美の居た２０３号室は呪われた病室となった。
そこに入院した患者は、どんな軽症の患者であろうと必ず脳死状態になる。
臓器を取り出すには、最も良い状態に。

院長に成った今も僕と薫はそれを利用して莫大な金を稼いでいる。
いや、これでは人聞きが悪い。
僕達は人助けを行っているのだ。

薫は彼女の代わりとして僕の傍に居てくれているようだが、余計な気遣いだ。
僕は常に彼女と一緒なのだから。
まぁ、さしずめ薫は優秀なアシスタントの一人でしかない。

そう、ぼくと正美はずっと一緒だ。
彼女は僕の心の中にいる。
それだけではない。

死体を葬りに行ったあの日、僕は一つだけ後悔した事があった。

彼女がああなる前に渡しておけばよかったと後悔したものがある。
だから僕は彼女の死体の一部を密かに持ち帰り、院長室にある特別な冷凍庫の中に保存してある。
それには2人の名前を彫った銀色の指輪が嵌めてある。
それが体のどのパーツなのかは言うまでもないだろう。

これも一つの愛のカタチ――

ｃａｓｅ３－７：闇（後書き）

無事に完成させることが出来ました。
この物語に出てくると登場人物の大半は何と言うか…独占意欲が強いというか、自己の願望に素直と言うか…とにかくそんな人たちです。
狂気に似たというよりは、狂気そのもののような愛情ですよね。
私としてはもっとドロドロな作品を仕上げたかったのですが（笑）
読んでくれた読者の皆様、有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6596c/

様々な色が交わる病院で

2010年11月20日10時21分発行